

第 49 回講演会<2017 年 12 月 12 日開催>

抵抗の音楽——私とショパン

在日韓国人ピアニストによる語りと演奏

崔 善愛 (執筆=水野孝昭)

■講演者……崔 善愛 (チェ・ソンエ)

(ピアニスト)

■司会……水野孝昭

(本学国際コミュニケーション学科教授)

崔善愛 (チェ・ソンエ) さんの経歴

北九州出身。愛知県立芸術大学院修了。米国インディアナ大学大学院へ留学。ピアノをジョルジュ・シェベックに、室内楽をヤーノシュ・シュタルケルに師事する。21 歳の時に指紋押捺を拒否したことにより再入国が不許可となり、最高裁まで 20 年間も争う。1999 年参議院法務委員会に参考人として招致されたことをきっかけに、法務省が特別永住許可の回復を認める。日本ペンクラブ平和委員。恵泉女学園大学などで講師も務める。著書に『ショパン—花束の中に隠された大砲』(岩波ジュニア新書)、『父とショパン』(影書房)、『十字架のある風景』(いのちのことば社)、『自分の国』を問いつづけて』(岩波ブックレット) など。CD も多数。



崔善愛氏

〈ピアノトークの呼びかけ〉

花束のように華麗なワルツ、心に語りかけてくるようなノクターン。「ピアノの詩人」とよばれるフレデリック・ショパンの名曲は、誰もが聴いたことがあるでしょう。年上のジョルジュ・サンド夫人との恋愛など、彼の短い生涯はロマンチックな物語に彩られています。

しかし、ショパンは祖国ポーランドを失って、家族とも引き離された亡命者=難民でした。

華やかなショパンの音楽の花束には、時代に抵抗する「大砲」が隠されているのです。

ショパンが花束に隠していた「大砲」。

この言葉を私に教えてくれたのは、ピアニストの崔善愛さんでした。日本で生まれ育ったのに「外国人」として指紋押捺を強制されて、拒否しました。そのためピアニストの道を歩むため米国の大学院に留学した時は、日本の法務省から帰国（「再入国」）を認められず、家族と離れ離れになりかけました。そうした切実な経験をしてきた崔さんにとって、時代と国籍は違っても、同じような境遇だったショパンは作曲家という以上の存在です。

音楽とは言葉も国境も超えたコミュニケーションの手段です。人々の心を隔てる「壁」も、魂を揺さぶる感動を共有するときに乗り越えることができます。

崔さんの奏でる「私のショパン」を聴いて、「祖国」とは何なのか、「在日」とはどんな人たちなのか、考えてみましょう。

〈当日のトークと演奏〉

ピアノの前に座った崔さんが最初に弾き始

めたのは『幻想即興曲 嬰ハ短調』でした。激しいリズムで鍵盤をたたき、ドラマチックで思いつめたような旋律が一気に駆け上がります。

「どうしてショパンはこんな激しい曲を作ったのでしょうか？」

崔さんは学生たちに問いかけました。

「ショパンがこの曲に込めた怒り、その正体を見つけましょう」

壇上のボードに自分の名前を「崔善愛」と書いて、「さい・ぜんあい」でなく「チェ・ソンエ」と日本の社会で名乗る理由をこう説明しました。

「固有名詞にはそれぞれの音があり、民族には母語があります。自分の名前をどう名乗るかは、その人間を表すコンセプトそのものなのです」

在日 3 世の崔さんの母語は日本語ですが、両親がつけてくれた名前の呼び方はゆるがせにできない、自らのアイデンティティーにかかわる問題だと考えているのです。

でも本人に説明してもらわないと、普通の人には「チェ・ソンエ」とは読めませんね。

どうしてこんなことに、崔さんはこだわっているのでしょうか？

◇ ◇ ◇

日本には多くの外国籍の人たちが住んでいます。外国人登録されている人数は 200 万人を超えているそうです。KUIS でも両親のどちらかが外国籍だったり、本人が二重国籍だったりする学生は珍しくありませんね。

そのなかでも「在日韓国人・朝鮮人」は日本に住むようになった経緯が、他のエスニック・グループとは違います。グローバル化に伴って日本人と結婚したり、ビジネスチャンスを求めたりして日本にきた人たちを「ニューカマー」と呼びます。それに対し、「在日」の人たちは、戦前の日本が朝鮮半島を植民地として支配していたことが原因で日本にやってきた人たちとその子孫です。

そうした「負の歴史」があるため、戦後になっても「在日」の人たちは長く差別と偏見

の対象でした。K-POP スターや韓流ドラマに憧れて育った世代には想像しにくいかもしれませんが、民族衣装のチマチョゴリを着ているだけでいじめられたり、韓国式の名前では就職できなかつたり、アパートの入居を断られたりすることが当たり前のように続いていたのです。

崔さんも子供のころは「普通でない」自分の名前を恥ずかしく思い、捨ててしまいたいと思ったほどでした。両親が町中で韓国語を話したりすると、周囲の視線が気になって離れて歩きたかったそうです。

中学 2 年生だった 14 歳の時には区役所で「外国人登録」のため、指紋を採取されることになりました。カーテンで仕切られた部屋で大人に囲まれて、犯罪人のように 4 枚の紙に指紋を採取されました。当時は、在日を含めて日本国籍を持っていない人は誰もが 14 歳になると、3 年ごとに左手ひとさし指の指紋を強制的に採取されていたのです。

崔さんも最初は「これが一生続くのか」と諦めて、17 歳の時も役所に言われたとおりに応じていました。しかし、3 回目の 21 歳の時、6 歳年下の妹が「私は指紋を押さない。学校の友だちは誰も取られていないのに、どうして私だけ指紋を押さなきゃいけないの」と言い出したのをみて、「差別を我慢することは次の差別につながる。つらい体験を次の世代に引き継いではいけない」と思い立ち、一緒に指紋押捺を拒否しました。

「外国人」が日本で暮らすときに役所に特別な登録を義務付けるのは、それなりに合理的な理由があるでしょう。ただ日本で生まれ育ち、社会の住民としてルールを守って暮らしてきた人たちまで一緒にして、「犯罪者予備軍」のように指紋押捺を強制することは行き過ぎではないでしょうか。

「日本で生まれ育って日本語ネイティブなのだったら、日本に帰化すればいいのに」と思う人もいるかもしれません。崔さんも同じ質問を何度も繰り返し受けてきました。



司会の水野先生

でも、よく考えてください。「在日」の人たちは植民地の出身で、戦前は「臣民」として日本の国籍を持たされていた人たちです。それが戦後になって日本政府が本人たちの意向をきかないで一方的に国籍を取り消してしまった経緯があります。無理やり「祖国」を奪って国籍を押しつけた側が、今度は勝手に「国籍」を奪って「外国人」扱いして指紋採取を強要するのはおかしい。学生だった崔さんが指紋押捺を拒否したのは、こういう気持ちがあったからです。

一個人が国家に抵抗すれば大きな代償を強いられます。ピアニストを目指していた崔さんにとって音楽留学が夢でした。しかし政府による指紋押捺を拒否していたため、いったん出国したら日本への「再入国」を認めないと言われました。留学するときは日本に住む家族と一生会えなくなるかもしれないという不安を抱いたままの出発だったのです。



2曲目は『ノクターン第20番 嬰ハ短調』でした。ショパンが祖国を離れて間もない頃に作曲されて、姉への手紙に「姉さんが弾くときの指馴染に」と添えられていた曲です。「だれかに語りかけるというよりも、ピアノの前で泣いているような曲です」と崔さんは言います。

生まれ育った日本から帰国を拒否された崔さんが、米国留学中も「自分は何者なのか？」と繰り返し自問していた時に出会ったのが、ショパンの書簡集でした。その時の思いを、ショパンの作品を中心としたCD「ŻAL」(2004年)のノートにこう書いています。

「ショパンの手紙を読み進めるうちに、私は彼に引き寄せられ、その言葉もまた彼の音楽と同じように心に響き始めたのだった。私にとって、自分の国に戻れない、家に帰ることができず、家族にも会えないということが、どんなことかを思い知らされた三年間の留学生活だった。その想いは、これまで数知れぬ戦争や内戦で国を追われた亡命者や難民、棄民の人々が抱いたであろう母国への想いとつながっていった。そしてそれは、まさにショパンの人生であったと同時に、私の父の人生でもあったことに気づいた」
(CDのノート「ŻAL」を抱く人に捧げる)より)

米国の大学院では音楽の先生たちも多くがロシアや東欧などからの亡命者でした。目の前で家族が殺されたような体験をしていた人もいました。しかし、彼らはあまり祖国を語ろうとしなかったのです。なぜでしょうか？崔さんはこう考えます。

「それは、心の奥底で未だ整理できない痛みを抱きかかえていたからではないかと思う。その痛みは『望郷』などという、かすかに甘い憧れすら感じさせる情緒的な言葉では



ピアノ演奏に聴き入る参加者

なく、本来あるはずのものを失ったまま過ごす喪失感、すなわち「ŻAL」だったのではないだろうか」（同上）

この「ŻAL」（ジャル）というポーランド語の言葉は、日本語に訳せば「わびしい諦念」「深い恨みのもと」「激しく反発する抗議」などという意味ですが、ショパン自身は「他の言語では表すことができない」とまで言っていたそうです。それだけ深い思いをこめて使ったのですね。同じ様な体験を味わっていた崔さんだったから、その意味を実感できたのでしょうか。

ポーランドでは 1830 年に大国の支配に反発した市民や学生が首都ワルシャワで蜂起しましたが、失敗に終わりました。祖国の友人も蜂起に加わっていることを聞いて、ショパンも帰国して運動に加わろうかと思ったのですが、家族や友人から制止されました。その蜂起が失敗したニュースを聞いたショパンの嘆き・悲しみが「ŻAL」という言葉に込められており、その言葉が崔さんの気持ちにぴたりと重なったのです。

「ショパンの悲哀や郷愁、喪失感といったものはすべて「亡命者の悲しみ」のうえにあるのです」（『ショパン—花束の中に隠された大砲』より）

ワルシャワ蜂起が弾圧された後、パリで有名になったショパンに祖国の新たな支配者であるロシア帝国から「ロシア皇帝専属の宮廷ピアニストという栄誉を与えよう」という申し入れがありました。しかし、ショパンはきっぱりと断ります。

「私は 1830 年の闘いには加わっていませんでしたが、心は彼らとともにありました。ですから、私は自分を亡命者だと思っています。ほかの呼び名は受け入れられません」

この時から、ショパンは故郷を喪失した「亡命者」になりました。このショパンの決断について、崔さんはこう書いています。

「これ以上のロシアへの抵抗を表す言葉があるでしょうか。

大国ロシアの皇帝が与える栄誉を受け入れれば、彼は一生楽に暮らすことが出来たでしょう。なにより、そうすれば祖国ポーランドに帰国することが簡単に許されたでしょう。

しかし彼は、侵略者からの栄誉を受けて帰国する道を選ばず、あくまで祖国独立を求めるポーランド亡命者であることを選んだのです。人間というのは、栄誉や勲章に弱いものですが、ショパンは、帰国ができないという代償を払っても、自分の考えや思想を貫き、公にしたのです」（同上）

このショパンの「抵抗の言葉」は、国家を相手にいつ終わるかもしれない闘いを続けていた当時の崔さんにとって、何よりの励みとなったことでしょう。

「代償を払っても、異国で孤立しても、自分の考えや思想をまげることにはできない」

ショパンの音楽にこめられた精神が、崔さんの「私のショパン」であり、それを今の時代へのメッセージとしてピアノ演奏で表現しているのだと思います。

純粋に音楽を楽しむ立場から言えば、ショパンの音楽を「在日ピアニスト」が演奏することに特別な意味を持たせるのはおかしい、という意見があるかもしれません。音楽は音楽として聴くべきだ、というのは正論です。崔さんの紹介も本来なら「在日」を強調する必要はなく、「国際的ピアニスト」とした方がふさわしいはずです。

ただ、音楽も現実の社会や時代と切り離されて存在しているわけではありません。それを作曲した人、それを演奏する人、そして、それに聴き入る人がいて、初めて「音楽」となります。それぞれ時代の空気を吸って生きている人による発信ですから、音楽にはまぎれもなく、その時代の思潮が反映されています。クラシック音楽家だからといって、現実

の社会へのコミットメントをためらう必要はないはずです。国家の力に翻弄(ほんろう)されて抵抗してきた音楽家というと、数々の名前が浮かんでくるでしょう。ベルリンの壁が崩れた時に壁の前でバッハを演奏した亡命チェリストのロストロポーヴィッチ、「私の生まれ故郷の鳥はピース(平和)、ピース(平和)と鳴くのです」といってカタロニアの民謡「鳥の歌」を国連本部で奏でたパブロ・カザルス…ここでは、現在進行形のパレスチナ問題へのかかわりを続けている指揮者のダニエル・バレンボイムのことを紹介しましょう。

ユダヤ人のバレンボイムは、イスラエルとパレスチナの若手演奏家によるウェスト＝イースタン・ディヴァン管弦楽団を結成、その演奏を通じて両者の交流を目指しています。(この活動についてはエドワード・サイドとの共著『バレンボイム／サイド 音楽と社会』(みすず書房)を参照してください。)私は朝日新聞特派員としてニューヨークに駐在していた2006年の暮れに、バレンボイムが指揮するこの管弦楽団のコンサートによる初のカーネギーホール公演を聴きました。ニューヨークでは5年前の9・11同時多発テロ事件の記憶がまだ生々しく、イラク戦争が続いている時期だったので、ホールの周囲はものものしい警備でした。

はつらつとした演奏でしたが、プログラムが終わると楽屋口でゆっくり取材する時間もなく、全員がそそくさとバスに乗り込んで立ち去って行きました。異様な緊張感でしたが、ユダヤ人とパレスチナ人の若者が同じステージに並んで懸命に演奏している姿は、政治の対立を超える「音楽の力」を見せてくれた気がしました。

このウェスト＝イースタン・ディヴァン管弦楽団は、その後もドイツを拠点に世界各地で演奏を続けています。パレスチナ問題は混迷を深めるばかりですが、こうした若い音楽家たちが活動を積み重ねていることに、かすかな希望を抱ける気持ちです。

◇ ◇ ◇

最後の曲は『バラード第1番 ト短調』でした。この曲もワルシャワでの蜂起があった1830年から作曲が始まり、35年に完成しています。

指紋押捺問題では、崔さんたち「在日」がマイノリティーとして扱われました。昔のことで平穏な生活を送っている「普通の日本人」には関係ないこと、と思うかもしれませんが。

ただ、今の社会では「多数派」と「少数派」の線引きは明確ではありません。人種、性別、宗教、国籍、肌の色など、その時々都合で分断線は引き直されて新たな「マイノリティー」が作られていきます。私たちは誰でも、いつかどこかで「マイノリティー」になるのです。「日本人」も世界全体で見れば、圧倒的なマイノリティーですね。

小さいじめを見逃していると、いつしか紛争や戦争といった大きな暴力につながります。少数派の人たちの声というのは「坑内のカナリア」のようなものかもしれません。その声に気がつかないでいると、いつか社会全体が歪められて取り返しのつかないことになりかねません。

留学を終える最後のレッスンで、自分も亡命者だったシェベック先生は崔さんの指紋押捺について「それは人間の尊厳を問う大切な、そして当然な行為だね」と励ましました。

「そして、『憎しみは、もうこれ以上くりかえしてはならないんだよ』と窓の外を眺めながら優しく語ってくださった」

ショパンの時代から音楽家たちは、それぞれの表現で時代と切り結んできたのです。世界中の人がショパンの名曲を愛していますが、崔善愛さんほど切迫した想いで弾いてきたピアニストは少ないでしょう。それは音楽でなければ表現できないメッセージがあり、音楽でこそ多くの人に伝えることができると信じているからだと思います。

この日の演奏と語りを聴いた参加者には、そのメッセージがしっかり伝わったと思いました。